

カセサート大学短期研修 帰国報告書

獣医学類 伴侶動物内科学ユニット 5 年 池上紗香

1. 研修参加の目的

本学では主に小動物診療を中心に学んでいるため、今回の研修に参加した主な目的は、水生生物、野生動物、エキゾチックアニマル、産業馬など多様な動物種の医療現場を直接体験し、獣医師としての臨床的な視野を広げることにありました。また、熱帯地域特有の症例や集団衛生・予防医学の実態を現場で観察するとともに、タイの文化や人々の生活・考え方に触れ、国際的なコミュニケーション能力を養うことを目標としました。

2. 研修内容および臨床的知見

Schedule for RGU Short-term Training at Faculty of Veterinary Medicine, Kasetsart University August 10-21, 2026							
	Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat Aug-08
							① Arriving at Suvarnabhumi TG671/ 15:30 ② Dinner at Shopping mall ③ check-in (International dormitory KPS)
	Aug 9	Aug 10	Aug 11	Aug 12	Aug 13	Aug 14	Aug 15
AM	9:30-12:00 • Orientation • Faculty/ campus tour	Aquatic Medicine Dr.Theeraporn and staff 08.30 am.	Aquatic Medicine Dr.Theeraporn and staff 08.30 am.	free time (Public holiday in observance of National Mother's Day)	Kamphaeng Saen Veterinary Diagnostic Center	Kamphaeng Saen Veterinary Diagnostic Center	free time
PM	free						
	Aug 16	Aug 17	Aug 18	Aug 19	Aug 20	Aug 21	Aug 22
AM		Exotic /Wildlife/Raptor Rehab center	Exotic /Wildlife/Raptor Rehab center	Equine unit	Equine unit	Presentation, Closing Ceremony/Animal Hospital tour (Dr.Tawin)	Departure: Suvarnabhumi Airport VZ570 (20:00) 4 students TG670 (23:55) 2 students
PM	free time				check-out (15.00) /go to BKK and check-in (RECOFTC)	Free time	

実習は上記のスケジュールで行われました。

(1)水生生物医療（Aquatics）

<エビ養殖場>

池の水溶性酸素量や pH などの主要な水質パラメータの現場測定を行いました。エビの健康状態を保つためには、パドルホイールを用いて水中に常に酸素を送り込むエアレーション作業や、水質汚染を未然に防ぐための丁寧な給餌量のモニタリングが不可欠であることを学びました。普段触れる機会の少ない水生生物ですが、適切な環境管理によって大規模な養殖生産を守り、地域の水産業や経済全体を支えるうえで獣医師が果たす役割の重要性を深く実感しました。

<ティラピア養殖場>

ティラピアの成長過程と農場での生産管理を見学しました。ここで最も印象的だったの

は、オスの方がメスよりもはるかに大きく成長し経済的価値が高くなるため、稚魚の段階でホルモン投与を行って全個体をオスに性転換させているという点です。生産性や経済効率を最大化するために、生物学的・内分泌学的なアプローチが実際の生産現場で賢く活用されていることを学び、大変勉強になりました。

<ワニ農場>

ワニの卵に触れ、手作業で皮を剥くという非常に貴重な飼育管理体験をさせていただきました。また、こちらの農場オーナーはワニとナマズだけでなく、さらにバッファローの飼育やサトウキビの栽培も手掛けており、すべてのエリアで水を循環させて活用されていました。猛暑の時期にワニの食欲が低下して余ってしまった生の肉をナマズの餌として与え、貴重なタンパク質源を無駄にしない持続可能な農場サイクルも見学し、エリア間で水を巡らせ無駄を出さない資源活用の工夫や生産者の方々の豊かなアイデアにとっても感動しました。



▲ワニの赤ちゃん



▲バッファロー



▲サトウキビをいただきました！

(2)臨床診断学 (Diagnosis)

<ELISA 試験・AFB 染色>

豚インフルエンザウイルスを用いた間接 ELISA 試験を行い、抗体検出のメカニズムについて学びました。また、抗酸菌を識別するために AFB 染色標本を作製し、顕微鏡下で観察しました。こうした一連のラボ検査を自分の手で丁寧に行うことで、正確な診断検査こそが集団全体の健康を守るために欠かせない重要かつ不可欠な基盤であることを再認識しました。

<リアルタイム PCR 検査>

エビのエラや泳ぎ脚から組織サンプルを抽出し、白点病ウイルス (WSSV) を検出するためのリアルタイム PCR 検査を実施しました。繊細な抽出プロセスから遺伝子増幅までを自分の手で行ったことで、ラボでの診断検査は単に分析機械を操作する作業にとどまらず、農場や集団全体の感染症拡大を防ぐための積極的なバイオセキュリティーツールとして機能しているのだと強く実感しました。

(3)エキゾチックアニマル診療 (Exotic)

石を誤飲してしまい食欲不振に陥った亀の超音波検査や腹水抜去、皮膚病を患うワラビーの薬浴など、多種多様なエキゾチックアニマルの処置を見学しました。

特に印象に残ったのは、来院するすべての患者に対してルーティンで糞便検査を行っていた点です。担当の先生からは「エキゾチック診療において糞便検査こそが最も重要な基本検査である」と教わりました。症状を表に出しにくいエキゾチックアニマルにおいて、隠れた病気の初期サインを早期発見するための糞便検査の絶大な価値と重要性を学びました。

(4)野生動物・猛禽類診療 (Wildlife & Raptor)

<野生動物 (ゾウ)>

棘下筋の萎縮によって跛行を起こしているゾウに対し、超音波マッサージによる深部組織の温熱療法やレーザー照射といった物理療法を体験しました。超大型動物であるゾウに対して丁寧にリハビリを行う様子を見て、スケールの大きな臨床現場の迫力を肌で感じ、深く心に残る貴重な経験となりました。



▲ゾウの超音波マッサージ

<猛禽類>

猛禽類を対象に、保定方法、身体検査の手順、胸筋への筋肉

注射の手技を練習しました。鋭いクチバシや爪を持つ猛禽類のケアにおいては、動物側の安全を確保することはもちろんのこと、彼らの危険な部位や習性を正しく把握して人間側の安全も守る、双方向の安全の視点が極めて重要であると学びました。

(5)馬診療 (Equine)

熱帯地域特有の寄生虫感染症であるハブローネマ症によって、ペニスや眼の粘膜に形成された肉芽組織を外科的に切除する手術を見学しました。

また、両後肢に重度なフレグモーネとリンパ管炎を発症した症例の診察にも立ち会いました。その馬は食欲不振に陥っており、身体検査のほぼすべての項目で著しい異常値を示しており、最終的に安楽殺という決断が下されました。重症症例の傍らに立ち、安楽殺という選択の妥当性について深く考えさせられたことで、獣医師は単に病気を治すだけでなく、困難な選択に対して倫理面や動物の苦痛緩和など多角的な視点から判断しなければなら

らないという重い責任について身をもって学びました。



▲ハブローネマ症の外科手術



▲重度のフレグモーネ、リンパ管炎

(6)バンケンキャンパスでの研修・成果発表

＜プレゼンテーション＞

2週間の研修の締めくくりとして、バンコクのバンケンキャンパスにて英語でのプレゼンテーションを行いました。英語でプレゼンをする機会はこれまでほとんど経験がなく、準備や発表はとても難しく感じましたが、とにかく明るく前向きに、この2週間で学べたことの楽しさや充実感をしっかりと伝えることができたと思います。

＜動物病院見学ツアー＞

10階建てというとても大きく、大きい大学動物病院の見学ツアーをしていただきました。普段、本学の伴侶動物医療センターでほとんど毎日を過ごしている私にとって、この見学はとても興味深く刺激的なものでした。本学との大きな違いとしてリハビリテーション施設が非常に充実しており、専用のプールが完備されていたことが挙げられます。また、特に素晴らしいと感じたのは、病院側がすぐに患者を奥へ預かるのではなく、飼い主さんがずっとそばに付き添い、それぞれの検査へと一緒に連れて行っていた点です。リハビリのプールでも飼い主さんと一緒に取り組める環境が整っており、飼い主と動物の絆を大切にする診療姿勢にとても感銘を受けました。



▲カセサート大学附属動物病院



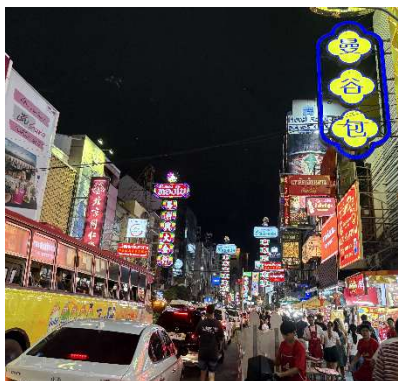
▲犬のリハビリのためのプール

飼い主さんを追いかけて泳いでいました

3. 文化体験および現地での生活

<現地観光>

週末や祝日はバンコクの歴史的な寺院（ワット・ポーなど）やチャトゥチャック市場、ヤワラート（中華街）に行きました。カンチャナブリのサファリパークでは、ツアーバスの窓から首を突っ込んでくるキリンと直接触れ合うという、ダイナミックで貴重な体験ができました。



▲ヤワラート



▲ヤワラートの小籠包、絶品でした！



キリンがすぐ目の前に！！▶

<食文化とキャンパスライフ>

日本でのタイ料理店でのアルバイト経験もあり、本場のタイ料理を味わえることは今回の研修の大きな楽しみの一つでした。実習期間中は、昼ご飯は学食で食べ、毎日実習が終わるたびに学内で開催されているナイトマーケットに行き、安くて美味しい食べものがたくさんあったため、ついついたくさん買ってしまいました。

今回食べた料理の中で一番美味しいと感じたのがカオソーイです。特にバンコクのあるお店で食べたカオソーイは、鶏肉がホロホロになるまで煮込まれていてまさに絶品で、誰にでもおすすめしたい味でした。

タイのお菓子ではロティサイマイに大ハマりしました。



▲バンコク「キンカーオラム」のカオソーイ、おすすめです！

友達が教えてくれて食べてみたところ本当に美味しく、滞在中に何度も買いました。また、カセサート大学の学生さんが学内にある美味しいココナッツアイスのお店へ連れて行ってくれたのですが、そのアイスが美味しすぎて、研修中に3回も食べに行ってしまったほどのお気に入りになりました。

現地食や甘味の満足度が非常に高く、滞在中に日本食が恋しくなることはまったくありませんでした。



▲アユタヤのお菓子ロティサイマイ



▲カセサートの学生、先生おすすめのココナッツアイス

4. 全体を通しての学びと今後の抱負

現地の人々はいつも温かい笑顔で接してくれました。特にカセサート大学の学生の皆さんは、英語が通じない飲食店で注文を助けてくれたり、学内の美味しいお店に案内してくれたり、休日のバン移動の路線を丁寧に教えてくれたりと、日常のあらゆる場面で親身にサポートしてくれました。真摯な思いやりと助け合いの姿勢があれば心を通わせることができると実感しました。私の英語力は決して高くありませんが、それでも日本で困っている外国人がいれば積極的に手を差し伸べたいと考えるようになりました。

2週間の研修を通して、小動物にとどまらない多様な動物種の医療、予防医学や集団衛生の重要性、そして臨床における倫理的判断の重みを学びました。ここで得た知見や経験を、今後の大学での学びおよび将来の獣医師としてのキャリアにしっかりと活かしていきたいです。

最後に、本研修をご指導いただいたカセサート大学の先生方、日々の学生生活や移動を温かくサポートして下さったカセサート大学の学生の皆さん、そして温かく迎えて下さったタイのすべての方々に心より感謝申し上げます。